

美術展覧会を際立たせるもの —河鍋暁斎展の構成分析—

原 翔子¹

概要: 同一作家の同一作品でも、展示される文脈によって作品が持たされる意味は異なる。個々の展覧会を唯一無二のものにする展覧会構成には、どのような仕掛けがあるのだろうか。本研究では2015年、2017年、2019年に東京都心の異なる美術館で開催された河鍋暁斎を主題とする展覧会を対象とし、展覧会図録に記載された作品を章ごとに追い、作品名に含まれる単語の共起分析によって可視化することで、展覧会構成の特徴を把握し、その差異や共通点を理解する。さらには、多様な定量的な手法の展覧会構成への利用可能性を提示する。

キーワード: 展覧会構成、可視化、河鍋暁斎、展覧会図録、共起分析

What Makes Differences on Exhibitions —Analysis of Composition of Kyosai Kawanabe Exhibitions—

SHOKO HARA^{†1}

Abstract: Even the same work by the same artist has different meanings depending on the context in which it is exhibited. What kind of gimmick is in the exhibition composition that makes each exhibition unique? This study targets the exhibitions with the theme of Kyosai Kawanabe held at different museums in Tokyo in 2015, 2017, and 2019, and visualize and the elements listed in the exhibition catalog. The characteristics of the exhibition composition are understood by seeing the differences and common points. Furthermore, the applicability of the various quantitative methods to the exhibition composition is presented.

Keywords: Exhibition Composition, Visualization, Kyosai Kawanabe, Exhibition Catalog, Co-occurrence Analysis

1. はじめに

河鍋暁斎(1831-1889)は、幕末から明治初期にかけて活躍した浮世絵師、日本画家である。彼を主題とした大規模展覧会が、過去5年間に於いて2年毎に東京都心の異なる3か所の美術館において開催された。しかし、定期的で開催されているにもかかわらず、その成果は検証されず、展覧会で表現された魅力がどこまでどのように伝えられたかは明らかになっていない。

図1は、Googleトレンドを利用し全世界を対象に「Kyosai」、「Kyosai Kawanabe」、「河鍋暁斎」のweb検索数推移を調査した結果である。横軸は時期、縦軸は検索数だ。実線で示された「河鍋暁斎」検索数が上昇しているのは、展覧会の会期前後において一目瞭然だ。逆に、web検索数によって人々の興味や関心が示されるとすると、東京都心における展覧会が開催されない限り、河鍋暁斎自身やその作品の魅力を発信し、広く受け入れられることは難しいだろうと考えられる。また、破線で示された「Kyosai」および点線で示された「Kyosai Kawanabe」の検索数はいずれも、「河鍋暁斎」の検索数よりも平均して多いことにも着目したい。「Kyosai」検索数が果たして河鍋暁斎を意図したものかは定かではないが、日本以外ではイギリスやアメリカで

の検索が多かったことから、英語圏の人々の河鍋暁斎への関心が計り知れる。とりわけ2017年にはすべての検索数がリンクしているが、その背景には、外国人観光客の多い渋谷で展覧会が開催されたことがあるだろう。

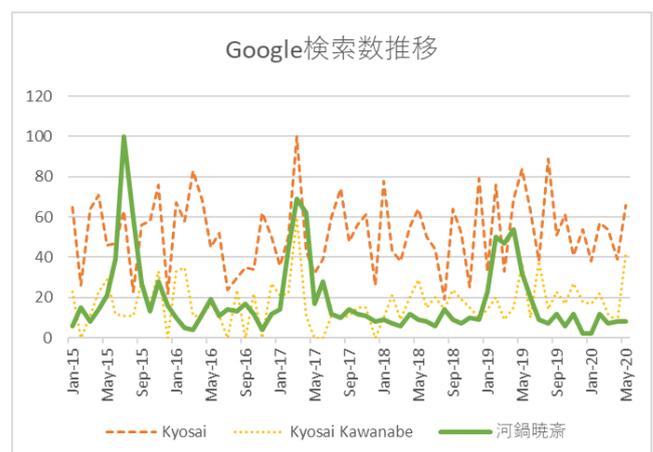


図1 Google 検索数推移

Figure 1 Number of Google searches.

本研究は「個々の展覧会を際立たせるものは何だろうか」という研究質問を設定し、河鍋暁斎を主題とした展覧会の特徴を展覧会構成の可視化によって明らかにすることを目的とする。特に、対象とする3回の展覧会には同一作

¹ 東京大学大学院学際情報学府
Graduate School of Interdisciplinary Information Studies, The University of Tokyo

品が異なる文脈において展示されていたということに着目したい。そこで、鑑賞者が作品を順路に従って鑑賞するという同様な形態をとりつつも、異なる文脈においてそれぞれ何を表現していたのかを振り返る。同時に、構成の観点からそれぞれの展覧会の特徴を視覚的に把握することで、展覧会の会期以外でも作品と人々の出会う場を提供する上で重要となる要素についての示唆を得るとするのが、本研究の意義および新奇性である。

以下では、まず可視化の方法をデータや手法とともに記述し、続いて個々の展覧会の概要や会期後の取り組みをまとめる。その後、実際に視覚化を通してそれぞれの共通点や相違点を探り、最終的にはこの結果から得られたインプレーションを議論する。

2. 展覧会構成の可視化にあたって

展覧会構成の可視化にあたって、用いるデータと分析手法について記述する。

2.1 データ

各展覧会の図録から章ごとにすべての作品名を抽出し、分析可能なデータとしてまとめる。昨今では公立博物館主体で作品のデジタルアーカイブこそ積極的に取り組まれているものの、期間限定で開催される企画展覧会のアーカイブにはまだ着手されていない。本研究では展覧会で販売される図録や配布される目録のデジタルアーカイブ化の重要性を説くうえで、分析可能な形式でのデータを手動で作成する。

2.2 可視化手法

同一の章または節に含まれる作品を同一の行に配置し、KH Coder を用いて、作品名に含まれる単語の共起分析を行うことで、章ごとの特徴を可視化する。本研究で扱うような日本画や浮世絵作品は、例えば「枯木に鴉」のように、描かれているものがそのまま作品名として付されている。この点において、テキストマイニングが展覧会の構造を分析し、可視化する上でも有効であるといえる。

3. 各展覧会について

各展覧会の概要と、会期終了後の web ページにおける個々の美術館の対応について記述する。

3.1 「画鬼・暁斎」展

2015年に三菱一号館美術館(千代田区・丸の内)で開催された「画鬼・暁斎—KYOSAI 幕末明治のスター絵師と弟子コンドル」展では、同美術館の設計者であるイギリス人建築家のジョサイア・コンドル(1852-1920)が河鍋暁斎の弟子だったことにちなんで両者の作品が展示された。同展は「Ⅰ. 暁斎とコンドルの出会い—第二回内閣勸業博覧会」、

「Ⅱ. コンドル—近代建築の父」、

「Ⅲ. コンドルの日本研究」、

3.2 「これぞ暁斎！」展

2017年にBunkamura ザ・ミュージアム(渋谷区・Bunkamura内)で開催された「これぞ暁斎！ ゴールドマンコレクション」展は、所蔵家のイスラエル・ゴールドマン氏に協力を得て開催された。同展は「序章 出合い—ゴールドマンコレクションの始まり」、

「第1章 万国飛—世界を飛び回った鴉たち」、

3.3 「河鍋暁斎 その手に描けぬものなし」展

2019年にサントリー美術館(港区六本木・東京ミッドタウン内)で開催された「河鍋暁斎 その手に描けぬものなし」展では、ゴールドマンコレクションと河鍋暁斎記念館から出品された作品を主として展示された。同展は「第1章 暁斎、ここにあり！」、

「第2章 狩野派の絵師として」、

4. 展覧会の可視化からわかったこと

共起分析による構成がネットワーク図として図2、図3、図4に示された。そこからそれぞれの差異や共通点を探る。

4.1 可視化結果

同じ章や節に含まれる作品群のうち、複数回出現した単

語がノード、その組み合わせがエッジとして表現されている。個々のノードの円の大きさは出現回数の多さに従っている。

図2は「画鬼・暁斎」展の構成の可視化結果である。図2から、まず、コンドルに関連する作品群が大きなクラスタがなしていることがわかる。次に、猫と蛙、鴉と白鷺が、それぞれ同文脈内で展示されていることがわかる。邪と観音の共起からは、善悪を象徴する作品同士を隔てなく同じ文脈の中で展示していることが推察される。

図3の「これぞ暁斎！」展の可視化結果からは、図2とは異なって鴉が枯木と一緒に描かれた作品が数多く展示されていることが一目でわかる。猫と蛙の共起関係は図2と同様だ。幽霊や閻魔が含まれる、禍々しい作品群がまとめられていることもわかる。

図4は「河鍋暁斎 その手に描けぬものなし」展の構成の可視化結果である。展示作品数が最も少ないながら、最も多くのクラスタが見られるのがこの図4である。美人画の章立てはなかったものの、幽霊や地獄大夫からは隔てられたところで美人画の作品群が構成されていることがわかる。風神は鬼と、雷神は観音と共起関係にあるのが興味深い。文字化けしているノードについては解明に至っておらず、追加分析と改善の余地がある。

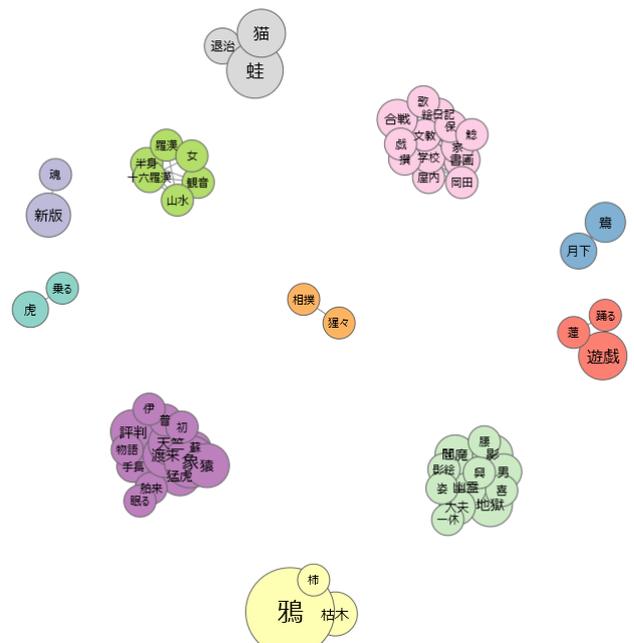


図3 「これぞ暁斎！」展
 Figure 3 The Second Result of Visualization.

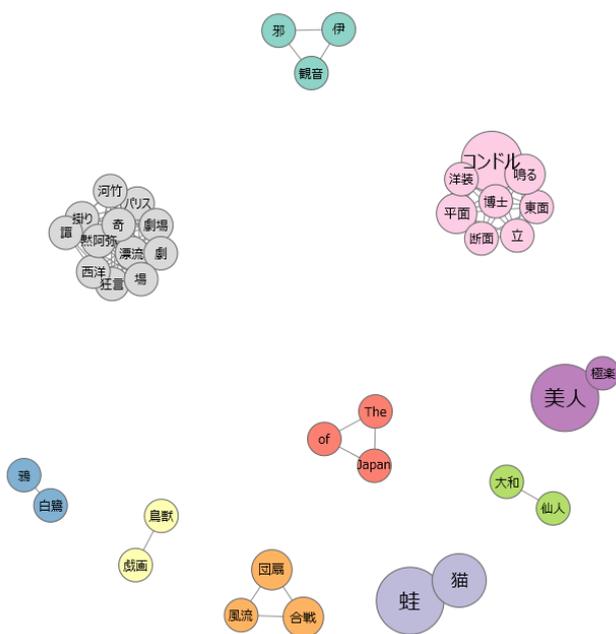


図2 「画鬼・暁斎」展
 Figure 2 The First Result of Visualization.

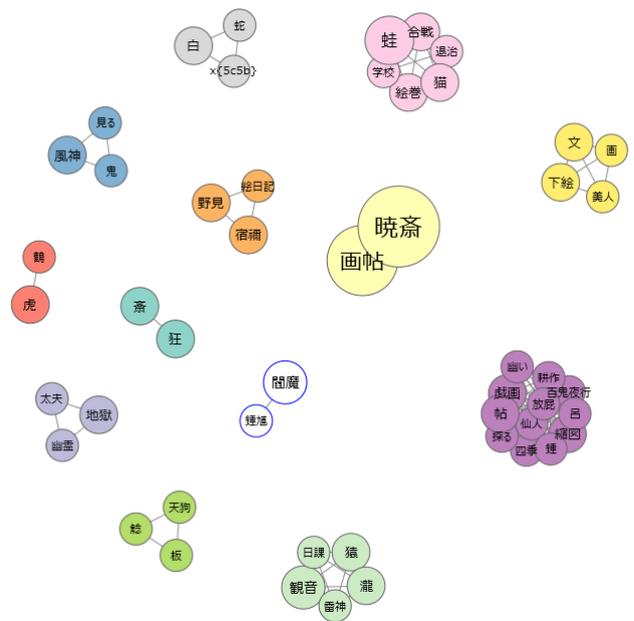


図4 「河鍋暁斎 その手に描けぬものなし」展
 Figure 4 The Third Result of Visualization.

4.2 可視化からわかったこと

可視化の結果から、各展覧会の共通点として、動物や異界の存在に特化した章立て、節立てが成立しやすかったことが分かった。また、「戯」や「遊戯」からわかる通り、暁斎の作品は鬼を描きながらも同時にユーモアも並立していることが推察される。

また、それぞれの相違点として、「戯画」の組み込み方が挙げられる。戯画を鬼や幽霊の文脈の中に組み込むか、

独立させて展示するかで、鬼や幽霊に対する鑑賞者のイメージにも変化がもたらされ得るのではないだろうか。

5. おわりに

本研究では河鍋暁斎を主題とした3つの展覧会の構成を可視化することを通して、各展覧会を唯一無二のものとして際立たせるものは、鬼や幽霊などのいわゆる「怖い」題材とユーモアの組み合わせ方にあることを明らかにした。河鍋暁斎を主題としていなくても、たとえば、暗い社会問題を題材とする作品と明るいユーモアあふれる作品を同じ章の中でどの程度コラボレーションさせるかで、同一作品であっても鑑賞者に与える印象は変わり得るだろう。

本研究では鑑賞者が実際に受ける印象までは分析されていない。また、作品の画像データを分析していないので、作品名からはわからないものの作品の中にしっかりと描きこまれているような要素については分析できていない。ここに、今後の研究としての発展可能性がある。図録のデータ化や定量分析目的での芸術作品データ利用が今後ますます促進されれば、鑑賞者と作品の出会い方や関係性が、展覧会の構成という観点から操作されるようになるかもしれない。

もちろん注目されることが最たる目標ではないが、集客率は運営資金に直結する。会期が終わった後も作品群を愛してもらえよう、例えば、単独の著名な作品のみをピックアップしてフライヤーとして配布するよりも、明るい作品と暗い作品を組み合わせながら、作家の作品の多様性を理解してもらいやすくするよう冊子をデジタルで制作するなどの取り組みは有効ではないだろうか。

謝辞 著者の指導教員である高木聡一郎准教授（東京大学大学院情報学環）をはじめとする、ご指導いただいたすべての方々に、謹んで感謝の意を表する。

参考文献

- [1] 「画鬼・暁斎-KYOSAI 幕末明治のスター絵師と弟子コンドル」展公式図録。
- [2] “「画鬼・暁斎-KYOSAI 幕末明治のスター絵師と弟子コンドル」展”。https://mimt.jp/exhibition/pdf/outline_kyosai.pdf, (参照 2020-05-12)。
- [3] 「これぞ暁斎！ ゴールドマンコレクション」展公式図録
- [4] “これぞ暁斎！ ゴールドマンコレクション”。
https://www.bunkamura.co.jp/museum/exhibition/17_kyosai/, (参照 2020-05-12)。
- [5] 「河鍋暁斎 その手に描けぬものなし」展公式図録
- [6] “河鍋暁斎 その手に描けぬものなし”。
https://www.suntory.co.jp/sma/exhibition/2019_1/, (参照 2020-05-12)。